



目 次

■ 館長巻頭言「「地球知」をわがものに！」	2
■ 寄稿「パソコンで文献検索する楽しみ」	3
■ 特集「附属図書館OPACリニューアル！」	4
■ 寄稿「史料の運命－植民地時代のナミビアの歴史史料－」	7
■ コレクション紹介「朝鮮近代民族・文化運動資料コレクション」について	8
■ 附属図書館講演会報告（平成18年度）「現代と私の文学」	9
■ 海外研修報告	10
■ 図書館統計（平成18年9月～平成19年2月）	11
■ 図書館活動日誌（平成18年10月～平成19年3月）	12
■ 編集後記	12

「地球知」をわがものに！

附属図書館長 亀山 郁夫

新緑に包まれる府中キャンパスでの大学生生活の始まりに、夢と希望をふくらませている新入生みなさん、ひとこと、おめでとう。

月並みですが、まず、みなさんをお願いしたいことが一つ。自分はこれから、この大学で何を学ぼうとしているのか？ 一人一人胸に手をあてて考えてほしいのです。今から40年前、当時のロシア語学科に入った私は、19世紀ロシアの作家ドストエフスキーを原語で読めるようになりたい、とひたすら願っていました。ただし、それは、文学が、私たちの生活のなかで、自明の何かとして認知されていた時代のことです。振り返ってみると、外大に入学する学生のなかで文学を学びたいと願っている人はごく少数で、多くが、商社、ジャーナリズム、銀行などでの活躍を夢見ていました。そうして彼らは、日本の企業を代表する最前線の国際人として、がむしゃらに働いてきたのです。

しかし、「地球社会化時代」と呼ばれる21世紀は、もはや、そうした生き方のみでは立ちゆかない時代です。地球環境の悪化が、私たちの日常的な関心の的となり、地球との平和的な共生という課題を、一人一人が背負って生きてゆくべき時代が迫っているからです。個人の、企業の、地球の運命がいまや一体化しつつあるといってもよい。そして、そうした時代の私たちに求められているものこそ、「^{グローバル}地球的な教養知」なのです。これを短くして「地球知」と呼んでいいと思います。40年前の私たちにとって「教養」が、文学、芸術などに関する幅広い素養を意味するものであったなら、私たちの時代の教養とは、むしろ、地球そのものに対する関心に根ざすものでなくてはなりません。無数の価値基準と情報の渦のなかで、私たちはより

高次のレベルにおける教養が求められるのです。それは、地球の仕組みに対する自然科学の知識であったり、グローバリズムの巨大な流れに対する冷静なまなざしであって、そこから、私たちは、自分なりの現実体験に裏うちされた言葉、「他者」を納得させられる言葉を、一言でいうなら「哲学」を獲得していかななくてはなりません。

他方、「教養」とは、同様に、周囲から期待される「知」の内容でもあります。単純にいうなら、「外大生なら」という仮定法による問いかけに答える「知」のありようです。それこそが、私たちの「地球知」の基本を形づくる知識の体系となるわけです。私がいまイメージする「外大生」の「地球知」とは、

- 1 語学力（コミュニケーション能力）
- 2 世界諸地域の固有の文化に対する理解力
- 3 国際教養力

です。では、3の国際教養力とは何を意味しているのでしょうか。私は、それを、地球の諸地域で進行する多言語多文化社会化の状況への深い理解力だと考えます。しかし、この国際教養力を本当の意味でわがものとするには、自分とは何か、「他者」とは何なのか、について真剣に振り返る必要があります。何よりも、現代の「豊かな」日本に生きることを意味を、きびしく問い返す姿勢が欠かせません。「平和的な共生」が、強者のおごりの裏返しであったり、「他者」への思いやりが、逆に、自らの「弱さ」を隠し、自分を見つめる苦しさからの逃げ道であってはならないからです。私たちの図書館は、そうした真の「地球知」の涵養のために、できる限りの努力を払っていくつもりです。

パソコンで 文献検索する楽しみ

本学外国語学部教授 中山 和芳

元来、機械に弱いものだから、回りの人がパソコンを使うようになって、やってみようとは思わなかった。別段困ることもなかった。

しかしそのうちに、大学内の会議の通知がメールで来るようになり、提出書類もパソコンにダウンロードして作らねばならなくなった。ちょうどその頃、使っていたワープロが故障した。会社に連絡したら、もうワープロは扱っていないので修理できない、と言われた。さらに、夫の仕事の都合により、半年海外で暮らすことになった妹が、時差の関係で電話での連絡は大変だから、Eメールができるようにしろ、と言ってきた。

こうなったら、もう、パソコンをやるしかない。家の近くの公民館で行われた半日の講習会に出て、初めてパソコンに触れた。そして、すぐにパソコンを購入した。説明書を読み、人に聞いて、何とか最低限のことはできるようになった。2000年の大学の府中移転の後、しばらくしてからのことだ。今でも私のパソコンの技術はその頃とあまり変わらない。まだエクセルが使えないし、圧縮や解凍もできない。そんな私でも、パソコンを使っているうちに、インターネットが文献検索にきわめて有効であることはすぐにわかった。

それまで、新刊図書の情報は、書店の書棚を眺めたり、生協がくれる『これから出る本』や新聞の広告・書評欄を見て、得ていた。家で購読していない新聞の書評は、大学図書館のラウンジで読んだ。

ところが、インターネットで検索すれば、新刊書の情報はすぐ手に入るし、新聞の書評も読める。国立国会図書館や東京都立図書館の検索

ページの書名欄にキーワードを打ち込むと、その言葉を題名に持つ本が次々と出てくる。気になる著者の名前を入れれば、その人の著書がすべて示される。つい最近、日本十進分類法の分類番号を入力して検索する方法も知った。

文献検索で難しいのは、何人もの人の論文を収めた論文集である。ふつうの図書館だと書名と編者しか記載しないから、個々の論文について知ることはできない。それが東京都立図書館であれば、すべての論文名と執筆者名が記載されているので、検索で拾ってくれる。

さらに検索が難しいのが、雑誌に掲載された論文である。総合雑誌や大学紀要などは、現物に当たらない限り、誰が何を書いているのかわからない。それが国立国会図書館や国立情報学研究所の雑誌記事索引にキーワードや著者名を打ち込むと、いとも簡単にヒットする。この方法で、どれだけ多くの未知の文献を知ったことだろう！

書名や著者名がわかったら、本の所在をパソコンで確認する。家の近くの小さな公立図書館でも、県立図書館が所蔵していれば、そこからとり寄せてくれる。ウェブキャット (Webcat) で所蔵を確認すれば、有料になるけれど、附属図書館を通じて、他大学の本を借用できるし、雑誌論文を複写してもらうこともできる。

パソコンのおかげで、これまでだったら知ることが不可能だった文献を知ることができ、そしてそれを手にすることが可能となった。

キーワードを考えて文献検索をしながら論文の構想を練ることは、私にとって至福の時である。問題は、文献検索に熱中するあまり、なかなか論文が書けないことである。



特集

附属図書館

OPACリニューアル!

附属図書館情報サービス係

平成19年3月末の図書館システムリプレイスに伴い、附属図書館蔵書検索システム（OPAC= One Public Access Catalog）もリニューアルします。本稿では、新たなサービスを中心に新OPACをご案内します。資料収集の必須ツールとして、新OPACを使いこなしましょう。

（注）本稿執筆時点（平成19年2月）では、新OPACは移行作業中です。このため、掲載の画面と実際の画面が異なる場合がありますのでご注意ください。

●新OPACトップ画面 <http://www-lib.tufs.ac.jp/opac/index.html>



※新OPACも「多言語」に対応しています。中国語簡体字、アラビア文字など、様々な言語・文字を表示・検索できます。対応している言語・文字の種類は、別項をご確認ください。

●図書に加え、「日本語雑誌」「大学紀要」が検索できます!



●【詳細情報画面】の「所在」欄から配置情報を参照できます！

所在欄の所在名称にリンクが張られている場合は、リンクをクリックすることで配置情報を確認することができます。配置先や手続きが不明な場合は、こちらを参照してください。

●【貸出・予約状況確認】画面から返却期限を延長することができます！

他の利用者から予約されていない資料は、返却期限内であれば1回に限り延長できます。インターネットへ接続することができれば、ご自宅からでも手続きできます。2回目からの延長は、資料持参の上、附属図書館2階カウンターにて手続きが必要です。

貸出 種別	借題 / 表示表示	所蔵	図書ID	巻冊次	貸出状況	予約状況
<input type="checkbox"/>	東洋文庫 / 東洋 文庫	4F閲覧室	0000157925	1冊/4/18 C/w01/18	一般貸出中 2007/4/18 1冊/18	0人
		02F閲覧室	0000063928	1冊/4/20 A/010/484	一般貸出中 2007/4/20 0冊/18	0人

※【貸出・予約状況確認】へは、新OPACの【ログイン】メニューから、ユーザID(キャンパスカードに印刷されているバーコードの番号)とパスワードを入力してアクセスしてください。パスワード未発行またはパスワードを忘れた方は、2階カウンターにご相談ください。

※教員対象の特別貸出・科研等貸出資料は延長の対象になりませんのでご注意ください。

●このほかにも順次、利用者サービスを充実していく予定です。

ASKサービス(附属図書館への質問)、OPACからの貸出予約、文献複写・相互貸借依頼など



● 新OPACの多言語対応について

附属図書館では、前OPACに引き続き、積極的に多言語に対応していきます。

新OPACでは、日本語、ローマン・アルファベット表記言語以外に、以下の言語を原綴り（資料に書かれているままの文字）で検索することができます。

中国語、韓国・朝鮮語、ロシア語、モンゴル語キリル文字表記、ギリシャ語、アラビア文字表記言語（アラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語など）

また、以下の言語の原綴り化を進めています。

タイ語、デーヴァナーガリー文字表記言語（ヒンディー語など）

<ヒンディー語資料の例>



※タイ語など、原綴り化進行中の言語を網羅的に検索する場合は、アメリカ議会図書館（LC）の翻字表“ALA-LC Romanization Tables（<http://www.loc.gov/catdir/cpsd/roman.html>）”に従って、ローマン・アルファベットに「翻字」したキーワードで検索してください。

● CiNii [サイニィ] (NII論文情報ナビゲーター)との連携について

国内雑誌論文の検索データベース「CiNii（<http://ci.nii.ac.jp/>）」の検索結果に表示される OPACへのリンクボタンを押すと、自動的に新OPACを検索し、本学の所蔵の有無を確認できます。

<検索結果・一覧画面の例>



※新OPACに所蔵が無い場合は、論文名をクリックして表示される詳細画面で「Webcat Plus」ボタンを押すと、他大学等図書館の所蔵を確認することができます。

OPACについてわからないことがありましたら、お気軽に2階カウンターにお尋ねください。

また、附属図書館ではOPACやCiNiiなど文献データベースのガイダンスを行っています。

あなたの資料収集スキルのアップにご活用ください。多くの方のご参加をお待ちしています。

史料の運命

—植民地時代のナミビアの歴史史料—

アジア・アフリカ言語文化研究所助教授 永原 陽子

アフリカ大陸の南西端に位置するナミビアの歴史を勉強する私にとって、しばしば利用するのが、この国のドイツ統治時代(1884年～1915年)の植民地当局の史料である。アフリカの歴史を考える上で、そもそも文字史料は例外的なものであり、ましてや植民地支配者の書き残したものなど、そこに生きた人々の生を考える上ではごく限定的な意味しかもたない、ということはずでに言い古されてきた。この史料とて例外ではない。しかし、史料はそれ自体が歴史を背負い、歴史を切り開くものともなる。

問題の史料は、植民地総督府の行政文書、裁判史料、本国植民地省との通信などから成り、「帝国植民地省文書」と総称されている。それらは、第一次世界大戦後の1919年にポツダムに設けられた「帝国文書館」に収納され、ナチ時代もそこに所蔵された。ナチス崩壊とともに、多くの史料、とりわけ外交関係史料が戦勝国に押収されたが、この史料はモスクワに運ばれた。「冷戦」は敗戦国の史料をも二分したのである。

東ドイツの「国立中央文書館」となったポツダムの文書館に問題の史料が返還されたのは、1950年代末のことである。アフリカ植民地が次々と独立へと動き出したこの時期、史料は歴史家たちによって積極的に活用された。「アジア・アフリカ・ラテンアメリカとの連帯」という社会主義国の国是は、旧ドイツ領アフリカ植民地にかんするかぎり、初めての本格的な歴史研究に道を拓いたのである。

もちろん、ポツダムに収められた史料は「西側」の研究者にとっては、近づきたいものだった。私も、あの手この手を使って1983年によくポツダムの文書館にたどり着いたが、ナ

ミビアに関するこの史料は、「とある理由から」見せられない、と言われた。当時、ナミビアが占領国南アフリカに対して激しい解放戦争を戦っていたことがその背景にあるのは容易に想像された。今となっては、その拒絶も、入り口に銃を担いだ兵士が立つ内務省内におかれた文書館の光景とともに、歴史の一齣ではある。

やがて「壁」の崩壊とともに、「東」にあった史料はすべて公開され、数年のうちに、東西に分散していた史料が、ベルリンに新たに作られた連邦文書館に集められた。奇しくもドイツ統一と同じ年に独立を果たしたナミビアに関わるこの史料も、快適な施設の中で心おきなく閲覧できるようになった。

しかし、それはあくまでも「北」の人間にとって、である。当事者であるナミビアの人々にとって、この史料が真に「公開」されたのは、2004年に全巻がマイクロフィルムの形でナミビア国立文書館に寄贈されたことによってである。この年、ドイツの経済開発相はナミビアを訪れ、100年前の帝国が行った植民地戦争について謝罪し、「反省」の意の表現として、この史料を寄贈した。一世紀を経て初めて、ナミビアの人たちは、上の世代の人々について書かれた史料を自分の目で確かめられるようになったのである。こうして新たな場を得た史料は、すでに盛んに行われているオーラル・ヒストリーの収集と並ぶ車の両輪として、この地域の人々自身が歴史を描くための材料となった。植民地支配にまつわる歴史認識の対立というおなじみの問題も、こうしたところから、建設的な対話への糸口が開かれつつある。ナミビアの若い世代の書いた歴史が現われる日も近い。

「朝鮮近代民族・文化運動資料 コレクション」について

東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部助教授
(元本学外国語学部助教授) 月脚 達彦



「朝鮮近代民族・文化運動資料コレクション」は、平成10年度図書資料（大型コレクション）によって、東京外国語大学附属図書館に収蔵された一連の資料群に付けられた名称である。

このコレクションは、近代朝鮮を代表する3人の民族・文化運動家に関する資料からなっており、その中には千数百枚の親筆原稿が含まれている。3人の民族・文化運動家とは、朝鮮近代文学の父とも呼ばれる春園・李光洙（1892-1950）、大韓帝国期から植民地時代にかけて主にアメリカと中国で独立運動に携わった島山・安昌浩（1878-1938）、歴史・民俗・文学など幅広い分野で研究を行なうとともに、3・1運動の独立宣言書を起草したことで知られる六堂・崔南善（1890-1957）である。

コレクションの内訳をみると、およそ次のとおりである。李光洙関係資料は、彼が出版した単行本、親筆原稿、長女の延蘭と妻の許英肅に関する個人的な記録、蔵書の一部、李光洙についての関連文献の計114点からなっている。安昌浩関係資料は、アメリカの大韓人国民会が1919年に発行した「全権委員委任状」と、1926年に中国で書かれた親筆書簡の2点からなっている。崔南善関係資料は、書簡1通、葉書1枚、親筆原稿の3点からなっているが、135枚の親筆原稿の内容は都合268首の時調（朝鮮固有の定型詩）である。全体の構成としては、李光洙関係資料が過半数を占めている。

コレクション購入後、その整理のための予備調査作業として、筆者が研究代表者になって平成13年度～平成14年度科学研究費補助金を受け、『朝鮮近代民族・文化運動資料コレクション』に関する基礎的研究（課題番号13610641）を行なった。

この作業の過程で、資料を稀少価値によってラ

ンク分けした結果、紙幅の関係上詳細は紹介できないが、李光洙関係資料は計114点中93点が稀少価値の高いものと評価され、その中でも李光洙の単行本、親筆原稿、肉親に関する資料など、特に稀少価値が高いものとして59点が選定された。安昌浩関係資料は2点とも、崔南善関係資料は3点とも、稀少価値が高いものと判断された。これら貴重な資料は、保管の便のために電子化されている。

その後、本図書館の作業によって、資料に登記番号が付され、整理された。ただし、本コレクションには、私的な書簡や個人記録なども含まれており、その取り扱いをどうするかというような問題もあって、全てを無条件で閲覧に供することができないことがありうるが、ご了解いただきたい。

本コレクションの成り立ちについて、その詳細な経緯は不明であるが、貴重な資料が散逸を免れ、一所に所蔵されたのは幸いだといえよう。本図書館が誇りうるコレクションの一つである。本コレクションによって、近代朝鮮の民族運動、朝鮮近代文学研究に新たな展開がもたらされることが期待される。

なお、本コレクションに関連する研究として、三枝壽勝「李光洙親筆原稿について」、巖基珠「六堂崔南善の親筆原稿について」（いずれも三枝壽勝他『한국 근대문학과 일본(韓国近代文学と日本)』ソミョン出版、ソウル、2003年に収録)が既に公刊されているので、関心のある方はぜひ参照されたい。

【編集注】 本コレクションは全て貴重書扱いですので、ご利用に際してはOPACで検索のうえ、2階カウンターで出納を依頼してください。
(一部ご利用いただけないものもあります)

現代と私の文学

作家 加賀 乙彦

まず、私がどのようにして文学の魂を得たのかについてお話します。戦争が終わった時、私は16才でした。学校に復帰しましたが、教科書の墨塗りなどもあり授業がまるで面白くありませんでした。それで学校に行かずに、朝から晩まで家で本を読んでいた。新しい本がなくて、疎開地からの古い全集ものが中心でしたが、改造社の『現代日本文学全集』や新潮社の『世界文学全集』を第1巻から順番に読み始めました。この時はじめて、読書がとても楽しく、意味があるものだとなりました。読んでいる途中で心に引っかかったのが、ドストエフスキーの『罪と罰』とトルストイの『復活』です。これは今まで読んだ小説とは違うぞということで、二人の作品を読みあさるようになりました。二人はどこが違っているのか。ドストエフスキーは、どうしても観念の人です。閉ざされた深遠な世界の中で、歴史と接触せずに思想を表現しています。一方、トルストイは歴史と人間の関わりを書いており、登場人物の性格や表情だけでなく、肉体をきちんと描いています。結局、私の心を一番強く打った作品はトルストイの『戦争と平和』でした。

振り返ってみると、私が生まれた時から日本はずっと戦争をしてきました。はじめて戦争が終わった時、何がおこったか。軍隊ではそれまでの記録を残さないように、毎日書類を焼きました。それから新聞の論調が突然変わりました。「鬼畜米英」から「これからは自由と民主主義の時代だ」と。わずか2週間の間に日本人の心が全てガラガラと180度変わりました。大人達が急に今までのことは間違いだったと言い出しましたが、こういうのって酷いじゃないか、そんなものが信じられるかというのが、その時の私の気持ちでした。大人達の右往左往ぶり、

変節ぶりを見てしまった私は、人間はたいしたものじゃないと思い、一般の思想とか哲学とかいうものも一晩で変わりうる脆弱なものだが、苦勞してそれらを創り上げたごく少数の人々、例えばドストエフスキーやトルストイのような人のみが変わらない強い心を持てる、と考えるようになりました。

読書は、大学に通うための都電の中で毎日2時間、学生時代から通算15年間続けていました。長編小説も含めて、かなりの量の本を読みましたが、最後に戻るのは、やはり『戦争と平和』です。今までに10回以上は読んでいますが、私にとっては故郷のような小説です。日本では世界各国の文学の翻訳がなされており、幾通りもの訳のドストエフスキーやトルストイが読めることは幸せなことです。

最後に皆さんに言いたいのは、本を読むことは人生で一番大事なことだということです。人類の叡智の蓄積である本を読まずに死ぬのでは、人間に生まれてきた甲斐がないとも言えます。『源氏物語』を読まなかった人は、日本人に生まれて、とうとう『源氏物語』も読まずに死ぬのかと自分の人生を嘆き悲しむことになるでしょう。それから、若いうちに世界中のたくさんの本を読んだ方が良いでしょう。例えばマフフーズの『バイナル・カスライン』は、面白いからぜひお読みなさい。また、『戦争と平和』やドストエフスキーの『地下生活者の手記』を読んでいない人もぜひお読みなさい。ああいう面白い小説を読まずに死ぬのはもったいないと思いませんか。

【編集注】本稿は、平成18年10月31日に開催された附属図書館講演会の要旨です。文中で紹介されている小説は、全て当館で所蔵しておりますので、ご興味のある方はぜひお読みください。



地域研究コンソーシアム情報資源共有化研究会 第2回海外調査に参加して

附属図書館

附属図書館職員2名は、本学COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点（C-DATS）」が進める電子図書館プロジェクトの一環として、標記調査に参加しました。

期 間：2006年11月1日～11月10日

目 的：図書館・情報関係諸機関における情報資源共有化の現状と課題についての調査（CRL, NARA）、多メディア・多言語資料の収集、およびデジタル技術を活用した公開についての調査（OCLC, シカゴ大学, CDL）

訪問先：

1. OCLC Online Computer Library Center（オハイオ州ダブリン）

1967年に設立された、世界最大の書誌ユーティリティー。総合目録WorldCatをはじめ、電子出版やデジタルコレクション管理ソフトなど、OCLCが提供する様々な図書館向けサービスの説明を受けました。アジア系文字を含む目録データの多言語化にも対応を進めています。

2. CRL（Center for Research Libraries）（イリノイ州シカゴ）

北米を中心とする大学図書館や研究図書館により構成されるコンソーシアム。参加館の所蔵資料のマイクロフィルム化やデジタル化による保存・公開プロジェクトを数多く推進しています。また、自館が所蔵する博士論文やマイクロフィルムは参加館への貸出を行なっています。さらに、資料の寄託を受けるなど、原資料の共同保管庫としての機能も果たしています。

3. シカゴ大学図書館（イリノイ州シカゴ）

7つのキャンパス図書館からなり、蔵書数700万冊を誇る全米最大規模の大学図書館。人文・社会科学資料専門のRegenstein Libraryは地域研究を資料面から支えることを重視し、主題専門司書によって厳選された現地語資料と大学院レベルの学術資料を豊富に所蔵しています。また、CRLが主催するプロジェクトにも参加し、資源保存・共有にも努めています。

4. NARA（National Archives and Records Administration）（メリーランド州カレッジパーク）

合衆国連邦政府作成文書を保存する国立の文書館。入館には厳しいセキュリティチェックがありますが、所蔵資料は一般にも公開され、館内で閲覧できます。緑豊かな周辺環境に配慮した建物は、自然光をふんだんに取り入れ、明るく快適な空間を提供していました。

5. CDL（California Digital Library）（カリフォルニア州オークランド）

1997年に設立されたカリフォルニア大学内の電子図書館。電子ジャーナルの契約や電子出版、機関リポジトリ「eScholarship」の構築など、全学的観点から、学内外に向けて電子的手法によるサービスを積極的に展開しています。

大学図書館の世界ではかねてより、各館が協力して、文献複写や相互貸借、学外者への利用開放など、資料の共有を進めてきました。今後のサービスを考える上で、デジタル技術の導入や内外の類縁機関とのネットワーク構築に積極果敢な米国での取組は示唆に富むものでした。

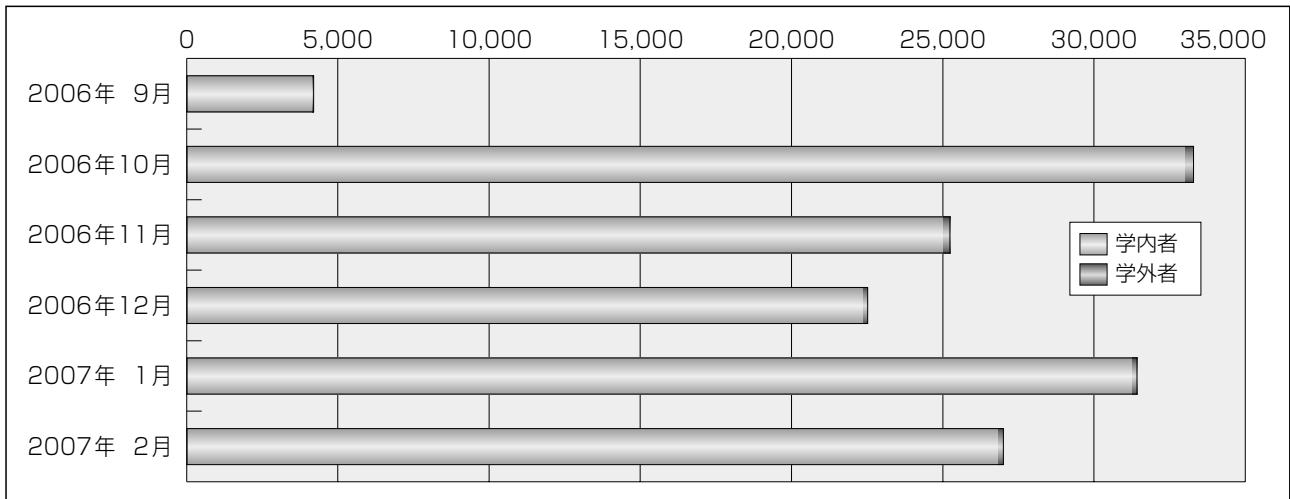
最後に、当調査への参加・実施にご尽力いただきました皆様に心から感謝いたします。

（加藤さつき・上田誠治）

図書館統計

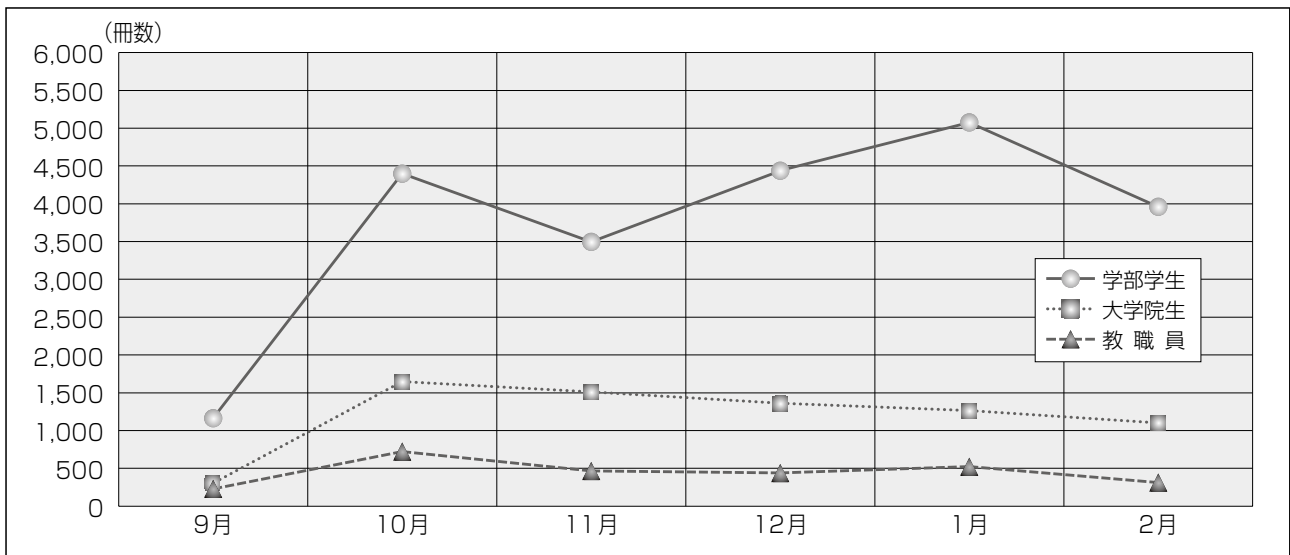
(月別入館者統計・貸出冊数統計)

月別入館者統計



	2006年 9月	2006年10月	2006年11月	2006年12月	2007年 1月	2007年 2月
学 内 者	4,130	32,989	24,976	22,344	31,240	26,801
学 外 者	74	310	267	180	188	209
合 計	4,204	33,299	25,243	22,524	31,428	27,010

貸出冊数統計



	2006年 9月	2006年10月	2006年11月	2006年12月	2007年 1月	2007年 2月
学部学生	1,163	4,398	3,496	4,437	5,076	3,960
大学院生	304	1,646	1,509	1,358	1,262	1,105
教 職 員	229	722	465	438	521	312
合 計	1,696	6,766	5,470	6,233	6,859	5,377

-
- 10月 5日 図書館オリエンテーション (10月10日と計2日間)
- 10月11日 情報検索ガイダンス (全10回～10月26日)
- 10月18日 平成18年度第3回選書委員会
- 10月19日 平成18年度第2回図書館委員会
- 10月30日 平成18年度図書館貴重書 (21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点」収集資料) 展示会 (～11月24日)
- 10月31日 平成18年度附属図書館講演会 (加賀 乙彦氏)
- 11月 1日 地域研究コンソーシアム・情報資源共有化研究会海外調査のため、アメリカ合衆国に2名派遣 (～11月10日)
- 11月16日 共同ワークショップ「日本の機関リポジトリの今2006」1名参加 (於 千葉大学) (～11月17日)
- 12月 6日 「学術論文と著作権」セミナー (学術情報室・附属図書館主催)
- 12月13日 平成18年度第4回選書委員会
- 12月17日 COE国際シンポジウム「アジア・アフリカ史資料学の現在と地域文化研究」発表者1名派遣 (於 東京外国語大学)
- 12月18日 「デジタル巨人の肩の上に立つ」機関リポジトリ、e-サイエンス、および学術コミュニケーションの将来に関する国際シンポジウム 3名参加 (於 都市センターホテル<千代田区>) (～12月19日)
- 2月 7日 平成18年度第5回選書委員会
- 2月23日 アジア情報関係機関懇談会 1名参加 (於 国立国会図書館関西館)
- 3月 6日 平成18年度第3回図書館委員会
- 3月23日 新OPACサービス開始
-

編 集 後 記

-
- 社会人になると、学生時代ほどまとまって読書の時間が取れなくなります。本を読み、それについて考えることで世界が広がることも多いと思います。今からさまざまな分野の本を読むよう心がけてください。(吉田)
 - やはり、自分が就いている仕事に興味や関心を持ってもらうのはうれしいことです。外語大生の中から図書館員という仕事に興味を持って、なりたいと希望する人がたくさん出てきて欲しいと思っています。(上田)
 - カード目録で検索していた10年前の図書館と比較すると、今の図書館のハード、ソフト面での充実振りには、目を見張るものがあります。今後、どのように図書館が進化していくのかとても興味深いです。(齊藤)
 - 春は別れと出会いの季節。その中で図書館は、いつもと変わらない姿を見せている。建物は替わっても、時を超えて存在するだろう心地の良いもの。その中に身を置く楽しみ、喜びは確かにあると思う。(高杉)
-

Castalia : 東京外国語大学附属図書館報 第13号

2007年3月31日発行

発 行 : 東京外国語大学附属図書館 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

電 話 : 042-330-5193 ホームページ : <http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>

印 刷 : 三鈴印刷株式会社